



弥勒菩薩座像（春日厨子入り）

日々好日



弘法大師



### 日々好日

六六五号

（令和六年七月発行）

寺報の表紙の紙が一月号から六月号まで以前とは違っていたことをお気付きのことと思いますが、それは歳末の掃除の際、押入れの段ボールの箱に無造作に入れられていた、様々な形状の紙を表紙のサイズに裁断して用いたものでした。

こうして折々に押入れの中など片付け整理していれば気持もよくより多くの収納もできるのですが、机の引き出しも収納庫も雑然としています。手が回らないのではなく心が回らないのです。

先きの用紙のように用途を変えて使用できるものは新たな生命を与えることが出来ますが、それができないものは適宜判断して始末しなければ後に後悔することになります。

梅雨で家にこもることの多い日々それを為したいものです。

加えて、心の中の我儘で横柄な煩惱という名の厄介ものの処分もお忘れなく。こうして諸々の整理をして暑い夏を幾らか清々しく過ごすことができれば、電気料金の値上がり分を幾らか抑えることが出来ようか。

### 弘法大師のお言葉

「肚の裏には蜂螫満てり、身の上には虎豹狂る」

（性霊集巻第一）

（腹の中には蜂やサソリなどの悪心が充滿し、外面は虎や豹などの暴慢な姿で振る舞う）



## 万徳院今昔

先々月号で、吉川元春公の正室（元長・広家の母）容光院と広家公の正室、慈光院のお墓のことを述べましたが、元春・元長父子の墓は北広島町の旧元春館奥の海應寺にあります。しかし墓印として松が植えられているのみで墓石はありません。

毛利元就の二男で文武に名高い元春父子の墓があのようになことでは恥ずかしいことですが、案ずることはありません。高野山奥之院の吉川家墓地の一隅にそれはあります。



（元長公五輪塔、高野山奥之院）

だが、その処遇は満足いくものではありません。何の説明板もなく知る人ぞ知るという状態なのです。写真は元長公の五輪塔で、その手前に元春公の五輪塔があります。そこには地輪に「安芸国元春」と大きく刻まれています。

万徳院には寛保元年十月十二日付の「万徳院由来記」なるものがあります。そこに元春公の正室慈光院の墓についての記述があります。

「慈光院殿窓玉芳珪大姉 元春公ノ御室 熊谷伊豆守信直ノ娘 慶長十一年十二月十一日御逝去 御塔當寺境内ニアリ 霊室式間半四方 御院号は百年御忌ニ當ル時贈号ナリ」

その他、「二代藩主広正公の御男 大助君 承応三年四月廿四日御逝去 浄覚栄林大童子 御石塔境内ニアリ」とありますが明治初年に慈光院の五輪塔と共に吉川家墓所に移されたものと推察します。

尚、慈光院の墓の造営の為に山の法面に石垣を築いています。その石垣はお城の石垣と全く同じもので同じ時期の築造であり、規模も大きく一見の価値がありますが、知る人は稀である。

慈光院の五輪塔と並立していたであろう宝篋印塔は現存しています。

「岩国市史」上巻の吉川家系図の一五四頁に次のような記述があります。

「明治元年に多田の宝積院、横山の万徳院に併合」

宝積院の仏像什物を移したかの観がありますが、現在それらを一物も見出せません。

唯、現在の本堂・庫裡を建てる以前は、本堂庫裡兼用の平屋の古い建物がありました。

この建物が、宝積院より移築したものだとい耳にしたことがあります。

移築して百年以上経過していますので随所で雨漏りしていましたが、瓦の差し替えはできないでいました。それは岩国特産の両袖の瓦はもろく屋



（旧本堂兼庫裡、本堂地鎮祭の日）

根が上がっての作業ができないのです。トタンを差し込んで応急処置ですませていたのです。

そんな状態でしたから本尊五大尊明王は腐朽著しく一刻も早く手を加えなければ存在も危ういようにこの若僧にも見えました。

そんな状態の寺に父は昭和五十七年に先住逝去により晋山したのでした。それは幼少の頃病弱で母親が万徳院でお百度を踏んで健康を祈念したという縁故で、長じて入寺した師僧寺でしたが、晋山までに幾多のドラマがありました。

境内の清掃などをする寺男的な一家が住みついていたのでした。そこで父は彼の男を住職にすべく様々な手立を講じました。縁故の寺々の法要に参加させたりお経等も教えたりもしましたが、永く寺に住んでいても住職たることは容易ではありません。住職となることを諦めたものの、寺からは退去せず居座り続けたのです。

それでも後任住職を決めなくてはなりません。檀家もなく荒寺に好んで住職する人はありません。老齡（当時79歳）の父は意を決して万徳院の護持をひたすら念じて八方手をつくして晋山までこぎつけました。

急遽プレハブの住居を立て夫婦で居住し朝夕の勤行などの法務をつとめていました。寺男の妻が鐘の音が煩いと役所に訴えでるようなことまでしたのです。

つまり、居住権を主張し、出て行って欲しいなら金によこせと言わんばかりのあり体でした。これでは高齡の父ならずともつとまりません。お寺にとっては大枚をはたいて出て行ってもらったことでした。世の中にはありがちなことである。

山寺で、小鳥のさえずりを聞き草花を愛で茶粥をすすっての余生ならば何の不自由もありませんが、住職を引き受けた上は責任もあり、手をこまねいてはおられませ

ん。

幸いに父を信奉する人々があり、日々の法務をなしつつ本尊不動明王をはじめとする諸尊の修復を晋山記念とすることを発願し、京都の仏像工房に完全修復を依頼したことでした。

当時は参道も車の通行が難しく運び出しも大変でした。その後、その参道も木を伐り山を削りコンクリートで擁壁をつくり拡幅し舗装もして普通車が通行可能にしました。

お金が湯水のように出ていきますが、それでも十月を経て完全修復なった諸仏をお迎えしたときには感激で涙が止まりませんでした。

本尊が見違えるように蘇れば荘厳具の傷みが気になります。護摩壇一式と、七尺もの前机などの修復は広佛さんにお願いました。

その折、仮の台に安置されていた弘法大師像の「御椅子」を広仏さんが新調しご奉納いただきました。

こうして数年が経過し、当然のことのように本堂新築の気運が生じ、それが具体化する



(五大尊明王)

中で、ならば父の存命中に成し遂げたいと、なぜか気があった河中工務店社長と相談。すぐに話は成立。元長公の四百回忌も目前でその供養のためにもできるかぎりのことがしたいと、すすめられるままに山口在住の彫刻師（有馬白匠要治）に堂の内外の彫刻をお願いしたことでした。建築費用の増額に悩みつつもそれを為してよかつたと、完成した御堂を目の当たりにしての偽りなき思いである。



（現住職晋山の日）

万徳院由来記に本尊の台座に如意宝珠を納めたとありますので外陣の正面に如意宝珠、御拝には五大尊の種子を刻していただきました。そしてその正面には威勢の

いい龍が参詣者を先ず迎えてくれています。

その龍の頭は胴よりはずれ、その中に寺門の興隆や浄財寄進者の諸願成就などの祈願の旨趣を書いた小さな御祈祷札を納めています。

こうして翌年春の落慶法要を待つばかりとなりましたが、正月十七日に阪神淡路大震災が発生し、加えて三月には地下鉄サリン事件もおこり、世の中騒然混沌とするなかでの落慶法要には様々の思いを込めた慶讃文を奉



（御拝の龍）

読させていただきました。その法要は元長公の「十宗大望之寺」の構想にのっとり、偶々、市佛教会長の任にあり会の役職にあった各宗派の住職に参列を請い境内をお練りの後、阿弥陀経と般若心経の読誦という誰もが予想もしない法会を営みしました。そして、諸師にそれぞれ簡明な祝辞をいただきました。住職である父の万感胸にこもるお礼の挨拶とその姿は終生忘れ難いものがあります。父にとっては人生最良最福の日であったことでしょう。

この日あることをと想像する。それは佛教詩人、坂村真民氏の「念ずれば花開く」を実感実証するものであったに違いない。

こうして、父は本堂落慶二年後に都卒天に旅立ちました。それを見越したかのように、高野山修学を終えて長男弘昭が帰ってまいりました。

その時には庫裡も新築し、茶室もその後、旧茶室の間取りだけは踏襲して新築しましたが、茶室は木道具が細かく古くもあり移築ができないということでの処置でした。

旧茶室のようなひなびた趣というか「無」を感じるには程遠いものがありますが、これも年月を経れば日常生活とは一味違った雰囲気醸す茶室となるであろうを期待しています。



（本堂落慶法要の朝）



○月光比丘、天に生まれて父母の憂悩を救う

仏は舍衛国の祇園精舎に在りました。その城中に一人のバラモンがあり、田を耕すを生業としていました。

その妻、一の男児を生み月光と名付けました。数年を経て月光は須達長者の子と遊び、僧坊の中に入り仏の教えを聞き法句を誦するを聞いて信敬するも七日の後に命終して忉利天に生まれました。

父母は悲嘆し号泣し、月光の屍を抱いて塚の間を往還する毎日でした。親族らはいろいろと慰め諭すのですが、聞く耳持たぬあり様でした。

「我、唯一子のみありしも我らを捨てて去りぬ。我らも死して子のもとに趣かん」と。

月光は天の宮殿で父母が動揺して心安んぜざるを見て父母を愍み仙人に姿を変えて天より下り身を炙るのでした。

父母は仙人を見て言いました。

「どうして我らの前で身を炙るようなことを為すや」と。

仙人は答えて言いました。

「わたしは、今一国の王とならんことを欲して身を炙っているのです。金をもって車を造り、もろもろの宝でかざり、四天王に車を牽かせ天下を巡ります」と。

夫婦は言いました。

「仙人よ。たとえ百年たつても汝の願いは叶うことはいであらう」と。

それを聞いて仙人は言いました。

「バラモンよ、小児の屍を抱いて願うこと百年、号泣すれども汝の願い叶うことなし」と。

それを聞いて父母は慚愧し泣くのを止めました。

それを見て仙人は本身に復し父母に言いました。

「私は仏の教えを信敬し天に生まれて父母の憂悩するを知り仙人となり父母を諭すために天より下りました」と。

父母はわが子月光天子の言うを聞いて歓喜し、伴われて仏のもとに往詣し法句を聞いて心開き意解けて須陀洹の悟りを得ました。

これを知って諸比丘は仏に問いました。

「世尊、この月光天子は、先世でどのような福業をなして父母の憂悩を救い今また小乗の悟りを得ることができたのですか」と。

仏は諸比丘に説かれました。

「月光天子は父母の憂悩を救うは今世のみならず、過去世においても福業をなしたのである」と。

諸比丘は重ねて問いました。

「過去世の福業とはいかなるものですか教えて下さい」

仏は説かれました。

「その昔、波羅捺国に一人の愚人あり。賊となり人を欺きたぶらかせていましたが、捕らえられて国もとへ連れ来られ死を宣告されたのでした。

その時、私（世尊）はその罪人の子なるも、性は慈仁、賢要、調順、国中の人はそれを知っていました。私は父の為に国王に父の助命を懇願したのである。国王は罪人を放ち殺さず、死を免れることができたのである」と。

その時の罪人とは今の月光菩薩の父、子とは言うまでもなく月光天子これなり。迦葉佛のもとに至り法句を聞く縁により、今世に我（世尊）に

値遇することを得て出家するこ

とが叶ったのである」と。

その時、諸々の比丘、仏の説き給うを聞いて歓喜して奉行す

という。



## あとがき

境内の随所で鮮烈な黄色の花を咲かせていた未央柳は花を落とし、今は紫陽花が咲いて緑一色のなかで存在感を示しています。梅雨空にふさわしい花である。

当山のような場末の小さなお寺でも数多の仏像をはじめ荘厳具など密教寺院ならではの法具が数知れずあります。また、仏画や佛書の類も半端でないものがあります。

それらを確認し整理することは老いた住職でも出来ることであり、責任だとしてそれらをパソコンに入力し什物簿としたことは、五月号で述べました。

これらの多くは檀信徒の協力を仰いで購入したものであることを思い起こし、その都度の尊い信心の証としてしっかり護持していかなければならない品々であることを改めて認識させていただきました。

お寺の什宝は在俗の方々の金銀宝玉の装飾品とは意味合いの異なるものであることも、知っていただければと思っています。寺報の表紙絵として順次紹介していきたいと考えています。すでに提示したものも含めてのことになります。

六月は宗門の山口支所の会合もあり、出席の予定でいます。まだまだ一頑張りしなければという気にはなっています。

発行者

高野山真言宗

宝池山 龍門寺

吉岡光昭



釈迦牟尼の

補処の菩薩は

慈氏彌勒

入定大師も

兜率浄土に



岩国市通津 3634 番地 3

☎740-0044

高野山真言宗

寶池山 龍門寺 発行

☎岩国 (0827) 38-4611 番